



マケマケの人

文屋一彦

——AM0:00

子供のころは明日がくるのが楽しみだった。
どんなひどいこと、不愉快なことがあっても、明日になればなにかいいことが待ってる
かもしれない。
素直にそう思えるような単純な子供だった。
だが……いまは……。
明日が怖い。
狭いネカフェの個室で寝返りを打ちながらおれは独り言を呟いた。
「ああ…もう、明日か……」

——AM8:00

ネカフェを出たおれは、とある駅前のロータリーにいた。
軍手にカッター、安全靴、タオル、IDカード……ボストンバックの中身を点検する。
大丈夫だ。すべてそろっている。
出勤報告は派遣会社に携帯メールで入れた。
あとは迎えのマイクロバスを待つて乗り込むだけだ。
ちなみにこの場所でバスを待つのはおれだけではない。
年齢も服装もバラバラの集団がひとかたまりできている。
おおむねおれよりも若いヤツらが多い。
20代から30代前半。
おれのように40過ぎているヤツはひとりかふたりぐらいか。
おれは若いヤツらの一団から少し距離をとった。
彼らがそれなりのこざっぱりした服装を身につけているのに比べ、おれは薄汚れた作業
ジャンパーに作業ズボン、といった風体だ。
よそゆきの服など求めようもない。服なんか着られればそれでいいと思っている。
思っているが、こうして並んでいると自分のみずぼらしさが際立つようだったま
れな気分が駆られる。
バスはなにをしている。
遅いじゃないか。
いらいらと足踏みをしていると、携帯の着信音が鳴った。
その場にいた集団がいっせいにガラケーやスマホを取り出してみる。

『件名 中止

本文 人員調整のため、本日の作業は中止となりました』

「なんだ、またかよ」

「交通費出せよな」

「クソ派遣会社が！」

口々に不平を鳴らし、その場に固まっていた集団が散ってゆく。

おれは携帯画面を見つめたまま、取り残されたようにその場にたたずんでいた。

やがて携帯のフタを閉じ、バッグを抱えて歩きだす。

とぼとぼと駅前の通りを歩いていると、ネカフェの看板が見えてきた。

『ナイトパック

23:00から7時間。

1500円』

一年は短く一日は長い。腕時計の針はようやく9:00を過ぎたばかりだ。

おれはその隣の雑居ビルの看板を見た。

雀荘『テンゴ』とある。

……そうだ、ここは以前きたことがある。おれが路上に墜ちる前のことだ。

確か『杏崎のん』という女流雀士が常勤で店にいたっけ。

おれは薄っぺらな財布のなかからよれよれの会員カードを引き出した。

『会員ナンバー042 朽木さま

またきてね。

待ってるニャン♡

のん』

カードの裏にはのんの自筆と可愛い猫のイラストが添えられてある。

つづいておれは財布のなかに納まっている全財産を数え直した。

有り金は2500円。

この雀荘のレートは店名と同じく点5のワンツーだから1000-2000のウマがつく。25000点持ちの30000点返し。トップで30000点とったとしてオカの差額の5000点を総取りで20000点。

計50000点の50%だから2500。それにウマの2000をプラスして4500円だが、ゲーム代をきっちり1500円差し引かれて3000円。

しかし、赤牌、裏ドラなどの『祝儀』もあるので3000円以上は稼げるかもしれない。

まあ、これはあくまでトップをとれば……のハナシだ。

ハコラスになれば2500円は軽く割ってしまう。

おれは雑居ビルの階段をのぼりかけ、慌てて引き返した。

ヘタをすれば、おれはこの日ねぐらを失う。

本当のホームレスだ。

どこぞで野宿するしかない。おそらく眠れないだろう。

確実に明日の派遣バイトに支障がでてくる。

あきらめよう……。
考えるまでもないことだ。この2500円は命金というやつだ。
くだらぬバクチで失うべきではない。
ネカフェのナイトパックが利用できるのは夜11:00から。
それまでなにをして過ごそうか。
公園でもぶらっこうかと踵を返しかけたとき、頬に冷たい滴があたった。
文字通り天を仰ぐ。
にわかに泣きだした空はおれを雑居ビルの一室へと引きずり込んでいた。

——AM10:00

「いらっしやいませ！ あらあ、お久しぶり！」
飛び込んできたおれの顔を見るなり、杏崎のんが満面の笑顔を浮かべてすり寄ってきた。
「ハハ……覚えていてくれたんだ」
おれはぎこちない笑みを返す。
「もちろん、キチクさんでしょ」
「いや、クチキだけど……」
キチクってなんだよ、鬼畜のことか。そんな名前あるものかと一瞬ムカッときたが、のんはタオルを持ってきてくれておれの濡れた髪や肩をていねいに拭きだした。
「なに、雨？ うわっ、凄い降ってる！」
滴を拭いながら窓の外を見やる。
待ち合いの席の客2人がいま気づいたとばかり身を乗り出した。
「あちゃー、俺、傘持ってきてないよ」
Tシャツにジーンズといった大学生ふうの若い男が拳を顎の辺りに持ってきていう。
「いや、天気予報では正午から雨だって言ってましたよ」
と冷静な口調はサラリーマンふうの中年男だ。細身の体にスーツをピシッと着こなし、物腰も穏やかな紳士といった印象を受ける。
このふたりは卓が埋まるのを待っていたのだろう。
早く始めたくてうずうずしているのが手にとるようにわかる。
「じゃあ、こちらの卓で」
のんが風牌を伏せてリーマンからつかみ取りさせる。
リーマンは東。
学生は西。
おれは南。
のんは北を自動的につかむ。
四人がそれぞれの席につく。
おれは自分にいい聞かせていた。
勝てばいいんだ。自分を信じろ。

安っぽいアイドルソングのようなフレーズを胸の中で繰り返す。
「それじゃ、始めます」
のんがサイコロのスタートボタンを押そうとした、そのとき——
からん。
ドア鈴が鳴ってほのかな柑橘系の香りとともにその男が入ってきた。

——AM 10 : 15

おれは入ってきた男に見覚えがあった。
懸命に記憶の糸を手繰り寄せる。
そうだ！
社長だ。おれが所属している人材派遣会社の社長じゃないか。
まだ若い。30をひとつたつ越えたぐらいか。
一年前、登録に訪れたオフィスの一角でこいつが20歳ぐらいの若い女子社員たちといちゃついているのを見たことがある。
まさにやり手の青年実業家といった風貌で背は高くイケメンだ。
自信とプライドが全身にみなぎっている。女がほっておかないタイプだ。
のんも確実にそのひとりでイケメン社長に媚びを含んだ視線を送っている。
「打てるかな？」
イケメン社長——確か桜木とかいったか、そいつが笑みを浮かべながらのんにきいた。
「もちろん、こちらへどうぞ」
のんが座っていた北家の席を譲る。おれのトイメンだ。
桜木は席につくとおれに向かって怪訝な表情をしてみせた。
知らず知らずのうちにおれはヤツをにらんでいたらしい。
説明会でチラとすれ違いはしたものの、桜木はおれが自社の登録従業員であることなど、記憶の端にすらとどめていないだろう。
真っ白なワイシャツの上に高そうなジャケットを羽織っている。
手首には高級そうな金の腕時計。就労者から搾取（ピンハネ）したカネでこいつは着飾っている。
そう考えると、ツモる手に力がこもる。
こいつだけには負けたくない！
負けてなるものかつ！

——AM 11 : 00

場はとんとんと進んで南3局に入っていた。
13巡目。ドラは①。

点数状況は以下の通り。

東家	学生	2 2 8 0 0
南家	桜木	3 0 2 0 0
西家	リーマン	1 7 8 0 0
北家	朽木（おれ）	2 9 2 0 0

桜木は 1 1 巡目でリーチをかけていた。
河にはこのような形で牌が並んでいる。

⑨西④⑧東②
西⑥②⑥リーチ③

おれは北、白、2 索を 3 フーロしていた。
手牌は四四七八。
そこへおれは四萬を持ってきた。
少し考えてはみたものの、おれは桜木の現物である四萬をツモ切った。
下家の学生が一牌ひいてエイヤとツモ切る。学生もダメで張っていたようだ。
学生の指から九萬が放たれた。

「ロン！」

おれは手牌を倒した。

「北、白で 2 0 0 0 点」

学生のリー棒 2 本と場にでていた桜木のリー棒 1 本をむしりとる。実質 3 0 0 0 点のアガリだ。

これでおれは念願のトップに立った。

まだまだ安心できない点差だが、このまま押し切れば夕食はステーキ弁当を買い込んで
もいいだろう。水とカップメンで腹を満たしてきたおれだが、今夜はひさびさに米と肉
を味わえそう。

「ちえっ、なんだよそれ。七萬か八萬切ってりゃトイトイでマンガンの手だろ」

学生がもう少し欲張れよ、といわんばかりに牌を卓底に叩き落とす。

おれは黙って店の張り紙を指し示した。

そこには、『他家のアガリ批判禁止』と書かれてある。

セコアガリといわばいえ。おれはおまえらと違って生活がかかっているんだ。

今夜のねぐらとメシを賭けて打っているんだ。

腹いっぱいメシを食い、暖かい風呂に入って、手足を伸ばして眠れるような人間らしい、
当たり前の生活を送っているわけじゃないんだ。

「負け犬の麻雀だな」

おれの胸中の眩きを聞いたかのようにトイメンから声が発せられた。

それは人を思いきり見下し、蔑んだ声だった。

——AM 11 : 07

「負け犬の負け組……。がつがつアガリに向かったかと思えば、土壇場でひよる。サイテーだな」

「んだとっ、この野郎！」

おれは思わず立ちあがっていた。人の汗の上前をはねるピンハネ野郎にいわれる筋合いはない。

「よしませんか」

静かな口調でその場をいさめたのはリーマン紳士だった。

リーマンはおれにではなく、ピンハネ桜木に向かっていった。

「どこのだれともわからぬ他人同士が卓を囲んでいるんです。お互いが打ちたい麻雀を打てばそれでいいじゃありませんか」

リーマンの言葉は正論の響きを伴っていた。

室内が一瞬、シン……と静まり返る。

「……そうでした。すみません」

桜木が素直に頭を下げた。

だが、それはリーマンに向かってであって、おれにではないらしい。

おれはムカムカが納まらなかった。

負け犬の負け組だと、エラソーに。一体何様のつもりなんだ。

好きでこんなふうになったんじゃないやねえ！

あのとき、勤めていた工場が倒産しなければ……。

親が借金をつくって夜逃げしなければ……。

なにか資格をとっていれば……。

大学さえでていれば……。

そうさ、おれだってもう少しともに……。

「リーチ！」

トイメンからかかった声に雑念を破られ、おれは顔をあげた。

ピンハネ桜木が白っぽい顔で牌を横に曲げていた。

——AM 11 : 22

場はオーラス。南4局の15巡目。ドラは三萬。

桜木は七萬を曲げ、リーチをかけた。

⑧95⑧北発

中南⑨九 9 南
一四リーチ七

「ふむ。撤退」

リーマンが惜しげもなく 赤 5 索を切る。

おれは 2 索をツモった。

おれの手牌は以下の通り。

六八八八②③③④④⑤ 6 6 ツモ 2

フツーならツモ切る一手だが、おれは用心深く周りの河を見渡した。

リーマンの捨牌。

9 ④④七 一北
一六東⑥ 5 ⑥
東⑨ 5

学生の捨牌。

⑨東発白 8 四
9 白 1 5 東⑨
8 北

おれの捨牌はこうだ。

⑧ 4 発 1 ⑦発
中九中⑨九南
北九

見てわかるとおり、5 索が場に 4 枚出ているのにつかんだこの 2 索はション牌。どうにもクサイ。

おれは現物の七萬を手出しで切った。

「同じく撤退。もう、いいや」

下家の学生も七萬を合わせ打つ。

桜木が牌山に手を伸ばした。

「——カン！」

桜木が迷わず暗カンする。

三◎◎三

ドラの暗カン。親マンは確定だ。

だが、それだけではない。めくられたカンドラ表示牌は二萬。つまりドラ三萬がモロ乗りしてリーチドラハチ。アガれば親のバイマンで一気に24000点。5万点越えの大トップだ。

桜木がニヤリ、と口角をつりあげた。

ゆっくりとした動作で王牌から一牌ひいてくる。

まさか……そんな、まさか？！

おれはごくり、と喉を鳴らして生唾を呑みこむ。

桜木があっさりと①筒をツモ切った。

嶺上開花（リンシャンカイホー）とはならなかったようだ。

どこからか、ふう～っ、という深い溜め息が漏れた。

いや、漏らしたのはおれか。

「撤退その2」

リーマンがいま切られたばかりの①筒を合わせ打つ。

次巡、おれがひいてきたのは八萬だった。

トイメンの桜木をチラりとみる。

心なしか桜木がまた笑みを浮かべたように見えた。

さあ、飛び込んでこい、負け犬……とでも思っているのか。

桜木は手の中から七萬をつまんでリーチをかけた。

手出しの七萬に八萬は打てない。

絶体絶命！

万事休すだ。

おれは絶望的な気分に駆られた。

ここにきて初めて、この雀荘に飛び込んだことに悔いを覚えた。

そもそも、なんでおれはこの場所にいるんだ？

カネも仕事も住む家もないというのに……。

こんなヤツが一番いてはいけないのが、この場所ではないのか……。

「キチクさん！」

突然、鞭打つような声が響いた。

声を発したのはのんだった。桜木に寄り添うような格好で後ろ見をしている。

「早く切ろうよ」

それはぞっとするほど無表情で、冷たい声音だった。

この顔……この声……。

子供のころのトラウマが甦ってきた。

そうだ……あのときも、こんな顔と声でおれははじかれたんだ。

—— 30 年前

小6のおれは学校の渡り廊下の角である女の子を待ち伏せしていた。
手にリボン掛けの小箱をしっかりと握り締めて。
彼女がきた。
椿原加奈子。加奈子は同じクラスの生徒で派手な顔立ちの美少女だった。
「あの……椿原さん！」
おれの出現に加奈子は、きゃっと小さく悲鳴をあげて立ち止まった。
「なんだ、朽木クンじゃない。脅かさないでよ」
「ああ……ごめん。えっと……その……」
「なに？ なんの用？」
おれとの会話を楽しむつもりはないようだ。性急に用件をきいてくる。
「椿原さん……お誕生日会をやるんだって？」
おずおずといった調子でおれは切りだした。
「うん。明日、家で」
「明日……なんだ。そっか」
本当は日時も場所もすべて知っていた。知っていて待ち伏せしていたのだ。
「くるの？」
おれがなにかをいう前に加奈子が先回りして早口でいった。
「きたいっていうなら、きてもいいけど……」
「けど……」
おれは語尾の部分を力なく繰り返した。
「よう、カナちゃん」
そこへ、隣のクラスの学級委員長が通りがかった。
三杉というヤツだ。小5のとき、加奈子と同じクラスだったらしい。
「三杉クン！」
三杉の登場に加奈子の瞳がハートマークになった。おれとは明らかに違う反応だ。
加奈子はそそくさとおれのもとを離れ、三杉に接近すると、
「あのね三杉クン。明日、加奈子のお誕生日パーティなの。でね、なんか気持ち悪い男の子に付きまとわれちゃって」
チラチラおれに視線を送りながら加奈子がいう。
声をひそめてはいるが、しっかりと話の内容はこちらにも伝わってきた。
「わかった。明日だね、必ずゆくよ」
「ホント！」
「ああ、カナちゃんはボクが守るから」
「嬉しいっ、はい、これ招待状！」
加奈子はおれが見ている前で誕生日パーティの招待状のカードを三杉に差し出した。
おれは中断された会話をこれ以上つづける気力はなく、手に持った小箱をゴミ箱に叩きこんだ。

——AM 11:42（現在時刻）

「おれにはきてもいい……で、向こうには必ずきてね……か」

おれは思わず声にだしてつぶやいていた。

「うわっ、なにこのオヤジ、キモッ！」

学生が独り言をつぶやきだしたおれを見て、上体をおおきく反対側に寄せた。

イチかバチか、こうなったら王牌から現物をもってくるしかない。

ヤツのハイテイを消すこともできる。

「——カン！」

おれは八萬を暗カンした。

三枚目のドラがめくられる。

「おおっ！」

周囲からどよめきが漏れた。

こんなことがあるものだろうか。カンドラ表示牌はまたしても二萬。

またもやモロ乗りしてリーチ、ドラ12。桜木の数え役満が確定した。

……やっちまった。

顔をあげると桜木とのんがほほ笑みを交わしあっている。

その姿が過ぎし日の三杉と加奈子に重なりあってみえる。

そうさ。そうなんだ。子供のころからおれはなんにも変わっちゃいなかった。

負け犬の負け組。

ずっとマケマケの人だった。

でも、子供のころは信じていた。

明日になればいいことが待っていると。

いや、信じたかったんだ……。

雨粒が窓をたたいている。

稲光が差し込み、一拍遅れて雷鳴が轟く。

こんな天候のなか、無一文で外に放りだされるのか。

文字通り、おれは天を恨んだ。

すべて奪われてゆく。

ねぐらも……オンナも……仕事も……自尊心も……根こそぎみんな。

チクショウ！

チクショウ！

チクショウ！

おれは胸中で呪詛の言葉を吐きながら王牌から最後の一牌をひいた。

それは——！

現物の①筒だった。

助かった。

おれは手牌の2索の隣、右端に①筒をとりあえず納めた。

喉がカラカラだ。

左のスタンドに置かれたウーロン茶に手を伸ばす。

手に持ったコップはじっとりと汗をかき、水滴が指の間に染みた。
とにかくおれは助かった。この局は流局で終わるだろう。
二本場では軽く鳴いて流すとするか。それも配牌次第だが……。
おれは濡れた指先で①筒をつまんだ。すると——
なんと隣の２索も一緒に持ちあがってくるではないか！
水の湿りが隣の牌をくっつけたのだ。
そして、それは計ったかのように宙で解き放たれ、ごろんとおれの河に流れ墜ちた。
「——ロン！」
桜木が高らかに宣言して手牌を倒した。

２ ３ ３ ３ ⑤⑥⑦ 西 西 西 三 ◎ ◎ 三

リーチ、赤イチ、三暗刻、ドラ１２！

閃光と雷鳴が同時に襲いかかり、おれの心を粉々に打ち砕いた。

—— P M O : 0 0

一文無しになったおれは土砂降りの雨のなかを傘も差さずにゆらゆらと歩いていた。
「キチクさーん、キチクさーん！」
幻聴だろうか？ 背中からのんの声がおれを追いかけてくる。
おれは立ちどまって振り返った。
白いビニール傘を差してそこにのんはいた。
濡れてかわいそうだからと傘を持って追いかけてきてくれたのだろうか？
「……なに？」
おれが虚ろな目で問うと、のんは小さな紙片を差し出した。
それは店に忘れたメンバーズカードだ。
いや、忘れたというよりも捨てた、といった方が正しい。
もう二度と雀荘などには立ち寄らないだろう。
「はい。これ」
おれが突っ立ったままではいると、のんがおれの手をとり、カードを握らせた。
のんの手は冷たく濡れていたが、若干の温もりがあった。
「また、きてね」
とびっきりの笑顔でいわれた。
「ああ……また、ゆくよ」
傘を揺らしながらのんが去ってゆく。
人生に一発逆転はありえない。
でも、人はそれを追い求める。

可能性という幻を追い求めながら生きつづける。
それが、それこそが人の生きる原動力なのだから……。

完

マケマケの人

2014年3月26日 発行

著者 文屋一彦

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵

郵便番号 135-0016

東京都江東区東陽1-28-13-401

お問い合わせ oohara.lee@ka-kuzo.jp

サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。

本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。